

ニュースレター

News Letter

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

巻頭言

当研究所の「実り」を、更に学生のもとへ

所長 内藤幹子（経営学部）

Mikiko Naito

皆様のもとに当研究所『ニュースレター』第56号をお届けすることができ、感謝です。

当研究所におきましては、年2回の「所員会議」に加え、各研究グループおよび実務委員会の責任者によって構成される「運営委員会」を定期的に開催することにより、課題と現状を共有・確認しつつ活動を進めております。その折ごとに、当研究所に連なる研究や作業の多彩さを教えられてまいりました。今号におきましては、その中から「いのちを考える研究グループ」の最新状況、そして2025年度に当研究所の活動に加わってくださった方々をご紹介します。お目通しいただき、関心をお寄せ頂ければ大変感謝なことです。



本学におきましては「キリスト教人間学インスティテュート」(以下、ICH)と称される、全学部生が自身の専門領域と並行して幅広くキリスト教関連科目を学ぶことのできるプログラムが2022年4月より開始されました。狭義の「キリスト教」「神学」を専門的に学ぶということではなく、「物事を包括的に見る力」(本学HPより)を養う中で自己を深く見詰め、多様な価値観を有する他者と共に生きる意志や知恵を内実化させていくことを志向する科目が、その柱として新設されてまいりました。「平和学」「宗教学」「死生学」などの学びの中で、学生たちは若い日に新たな見識や「気づき」を得て、現代社会および何物にも代えがたく貴重な自分自身の人生へと踏み出していくことが可能となることでしょう。

ICHにも関わる立場から当研究所の活動を見ると、将来的に何らかの形で各グループにおける研究の「実り」を、ICHのプログラムの中でも学生たちに届けることができたらどんなに素晴らしいだろうという「夢」が浮かんでまいります。「保育」「教育」「平和」「いのち」「歴史」「文学」、当研究所からは「キリスト教」という共通の土台の上で多様に展開される最新の「実り」が生まれ続けていくからです。現在も既に、各種の公開講演会などの場が学生を含め多くの方に開かれておりますが、更なる希望を抱きつつ、新たな年度へ向かってまいります。

『「いのち」理解について—キリスト教の視座から—』

尾之上 さくら (理工学部)
Sakura Onoue

明治学院大学教授の岡田 仁 先生をお招きして『「いのち」理解について—キリスト教の視座から—』というタイトルでご講演いただきました(写真)。

本講演では、キリスト教の視座から「いのち」の本質が考察されました。まず、新型コロナ禍における生命至上主義への批判を出発点に、聖書に記される「ビオス」「プシュケー」「ゾーエー」という三側面を通して、「有限な生命」と「神との関係にある永遠のいのち」との違いが読み解かれました。

生命至上主義というのは、人間の生命を絶対的な価値とみなす生命倫理学上の立場を指します。新型コロナ禍では、緊急事態宣言が発令され、諸外国では都市封鎖、日本ではまん延防止等重点措置による外出規制など、生命保護を最優先とする政策が実施され、その結果として法制度上の人権制約が行われました。カトリック司祭で思想家のイヴン・イリイチや神学者アレクサンドル・シュメーマンは、この生命至上主義に批判的です。彼らの批判の根底には、「永遠のいのち」と「有限な生命」との隔たりがあります。聖書には、いのちを表す三つの言葉があります。生物学的な有限な生命で、生存期間や生活を示す「ビオス」、人間の魂や生命の営みを指す「プシュケー」、そして神との関係に基づく「永遠のいのち」、すなわちイエス・キリストの十字架と復活によってもたらされるいのちを意味する「ゾーエー」です。

続いて、聖霊を「いのちの源泉」とするモルトマン神学を踏まえて星野 富弘さんや西村 隆さんの証言が紹介され、いのちの聖化と使命への応答を通し、信仰共同体としての教会の役割が語られました。

モルトマンが聖霊を「いのちの御霊」と呼ぶ背景として、ジャン・カルヴァンの「聖霊は『いのちの泉』であるならば、あらゆるいのちの経験において、この源泉に出会うことができる」という言葉があります。モルトマンは「聖霊は人間を無限に開かれた『いのち』の始まりへと導き、キリストとの交わりにおける新しいいのちの主体とする」と述べています。この無限に開かれた「いのち」、すなわち永遠のいのちとは、真実の神が私たちを受け止め、存在を承認し、惜しめない恵みを注がれていることを知ることで。講演では、病気や障害を受け入れ、死への恐怖を乗り越え、生きる喜びと希望を見いだした星野 富弘さんと西村 隆さんの体験が紹介されました。

星野 富弘さんは、中学校教諭として勤務中に事故に遭い頸髄を損傷し、手足の自由を失いました。その後、口に筆をくわえて文や絵を描き始め、クリスチャン詩画家として歩み始めます。神の愛を知り、キリストと出

会ったとき「生きていくことが嬉しくなった」、素直に神の愛を受け入れる中で「いのちの再生」を経験したと語っています。重度の障害を負いながらも、神から与えられたいのちを最後まで生き抜かれました。

西村 隆さんは、関西学院大学神学部卒業後、37歳で筋萎縮性側索硬化症(ALS)を発症しました。ALSは治療法がなく、全身まひや呼吸不全が進行するため、自らの価値が崩れていく感覚に襲われたと記されています。その西村さんは「私が抗うことをやめると、神様が近づき、私を支えてくださったのです。大切なことはただ一つ、自分を神様に委ねる信仰さえあれば、不条理に立ちすくむことはないのです」と述べています。神の愛に包まれているという確信を得たとき、西村さんは生きる意味を見だし、その中で見つけた幸せをエッセイ集『神様がくれた弱さとほほえみ』にまとめられました。

この講演を通して、日々の歩みの中でキリストの支えを信じ、主イエスのいのちにあずかりながら自由と責任をもって使命を果たして生きることこそが、神から与えられた永遠のいのちを生きることでありと理解しました。また、教会は神の家族として一つに結ばれた信仰共同体であり、人間の自由と多様性を抑圧し、個人を国家やイデオロギーに従属させようとする全体主義的支配の論理に対して抵抗する使命を担っていることを知りました。

以上がご講演の報告となります。最後になりますが、グループメンバー一同、岡田 仁 先生の温かなお人柄に直接触れることができましたことを心より嬉しく存じます。難しい内容を分かりやすくご説明いただき、深い学びと多くの気づきを得ることができました。貴重なお時間を割いてご講演賜りましたことに、改めて厚く御礼申し上げます。

岡田 仁 先生の略歴

関西学院大学神学部を卒業後、日本基督教団正教師として活動。日本基督教団佐世保比良町教会の牧師を務めるほか、ドイツ・プロテスタント教会クアヘッセン・ヴァルデック州教会ホフガイスマル牧師研修所にてエキュメニカル・コワーカー(協働牧師)として従事。さらに、財団法人基督教イースト・エイジャ・ミッション富坂キリスト教センター研修主事などを歴任し、現在は明治学院大学教養教育センター教授としてご活躍されている。



岡田 仁 先生

青木 由美恵 (看護学部)

Yumie Aoki



看護学部の青木由美恵(あおき ゆみえ)と申します。専門分野は老年看護学ですが、初年次教育や生涯学習に関する科目も担当させて頂いています。私のキリスト教との出会いはイギリス留学中で、大学院の学修を支えてくれた人々の多くは、キリスト教の精神に基づき様々な活動をされ、私も彼らとともに教会に足を運ぶ機会もありました。

看護学部では、校訓「人になれ 奉仕せよ」の具現化という考えのもと教育を行っています。また看護は神に召されて使命につくこと、看護実習は神による派遣と捉え、3年生の専門領域実習前の毎年5月12日前後に、チャペルで派遣式を行っています。5月12日はフロレンス・ナイチンゲールの誕生日で、看護師の社会貢献を称える目的で国際看護師協会により設置された「国際看護師の日」です。学生も実習において多様な人と関わりながら、実社会における課題発見に取り組んでいきます。ナイチンゲールは、看護師は専門職として知識や技術のみならず高い人間性が必要であるとし、これは本学の校訓にも通じ、派遣式は意義深いものとなっています。

この度は、キリスト教について学ぶ機会を与えて頂き感謝申し上げます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

梅澤 佑介 (経済学部)

Yusuke Umezawa



本学経済学部で政治学を担当している梅澤と申します。私の専門分野は西洋政治思想史です。なかでも特に19世紀後半から20世紀前半までのイギリス政治思想史における「シティズンシップ論」と呼ばれる議論を中心に研究しています。

シティズンシップとは「市民が備えているべき資質」のことですが、こうしたテーマをめぐる議論は本学での私の教育実践にも深く関係しています。というのも、私は政治学が「市民を育てる学問」だと考えているからです。市民の定義は思想家によって多種多様ですが、とりわけ現代において重要なシティズンシップの一つは「自己を相対化する能力」であるように思われます。

例えば、イギリスのT・H・グリーン(1836-82)という思想家は、宗教的言説が徐々に力を失いつつある時代に、神に代えて「永遠意識」という概念を自身の哲学の出発点に据えました。永遠意識はあらゆる知識を持つ形而上学的存在であり、それゆえ現実の人間がそこに到達することはありえません。したがって、現実の人間の認識は絶えず永遠意識という基準から相対化されることとなります。

「民の声は神の声」を地で行くポピュリズムが跳梁跋扈する現代において、人間の傲慢を戒めるキリスト教的な視点はますます重要になってきているように思います。

ヒース・デビッド・ジョン (国際文化学部)

Heath, David John



私は本学国際文化学部英語文化学科に就任して約10年になりますが、それ以前から約25年にわたり、翻訳業を中心に広告業界や放送業界で仕事をしてきました。現在は、そうした実務経験を研究や教育にも活かしながら、教育・研究活動に取り組んでいます。なお、就任前には旧関東学院女子短期大学において、約10年間、非常勤講師としてお世話になりました。キリスト教信者として、バプテスト派の組織である関東学院に関わることができたことは、私にとって大きな安心感と誇りを覚える出来事でした。

私の歩みは、キリスト教信者である英国オックスフォード在住の母のもとで、メソジスト教会に通いながら英国で育つことに始まります。その後、日本の文化と日本語に強い関心を抱き、日本に移り住み、日本人女性と結婚しました。1994年には、妻と共に鎌倉で再洗礼を受けています。

近年、世界各地で武力衝突や分断が続き、将来への不安が高まる中で、イエス・キリストに信仰を置くことの意味を改めて深く考えるようになりました。新約聖書ヨハネによる福音書14章27節の「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える」という御言葉は、揺れ動く時代にあって大きな支えとなっています。

このたびキリスト教と文化研究所の所員となりましたが、聖書を難解なものとしてではなく、私たちの日常生活に寄り添う言葉として読み、そこから日々生きる力を見いだすことの大切さを、少しでも多くの方々とお分かち合えればと願っています。そのために、微力ながら貢献できれば幸いです。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL: 045 - 786 - 7873 (研究所直通・月～金9:00～16:30)

FAX: 045 - 786 - 7806 (研究所直通・24時間受付)

発行者：内藤 幹子

Director: Mikiko Naito